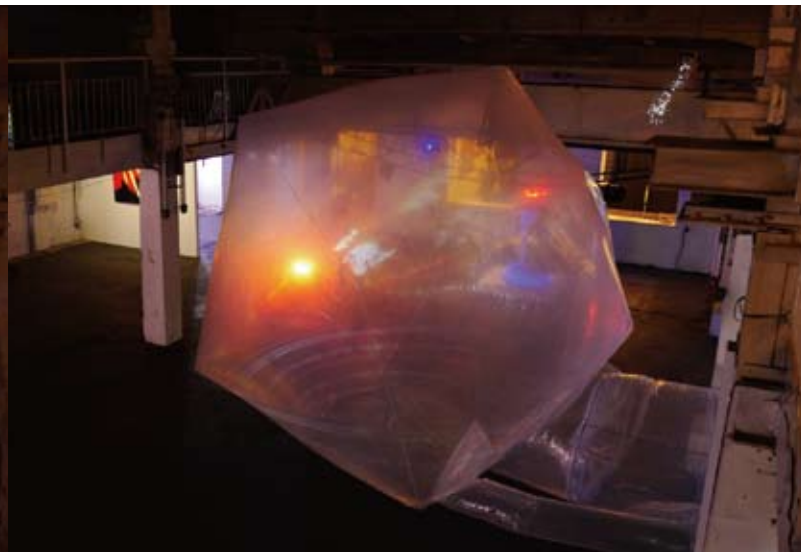
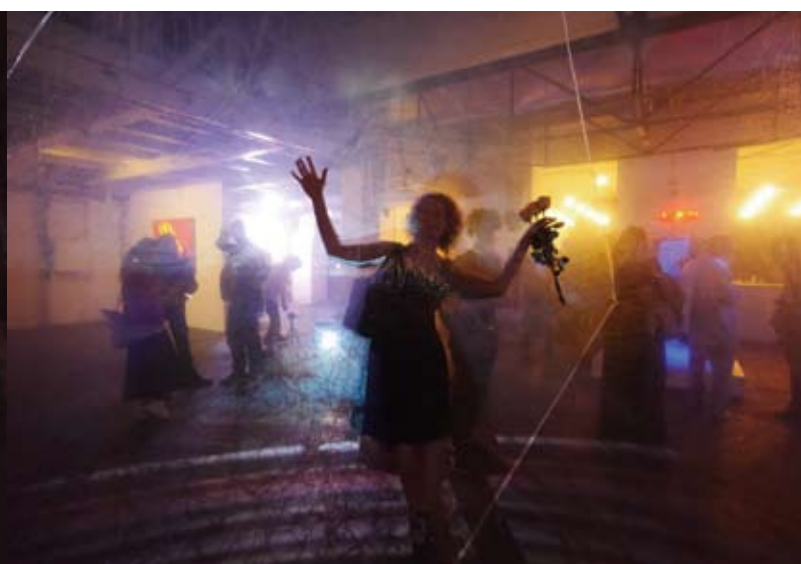
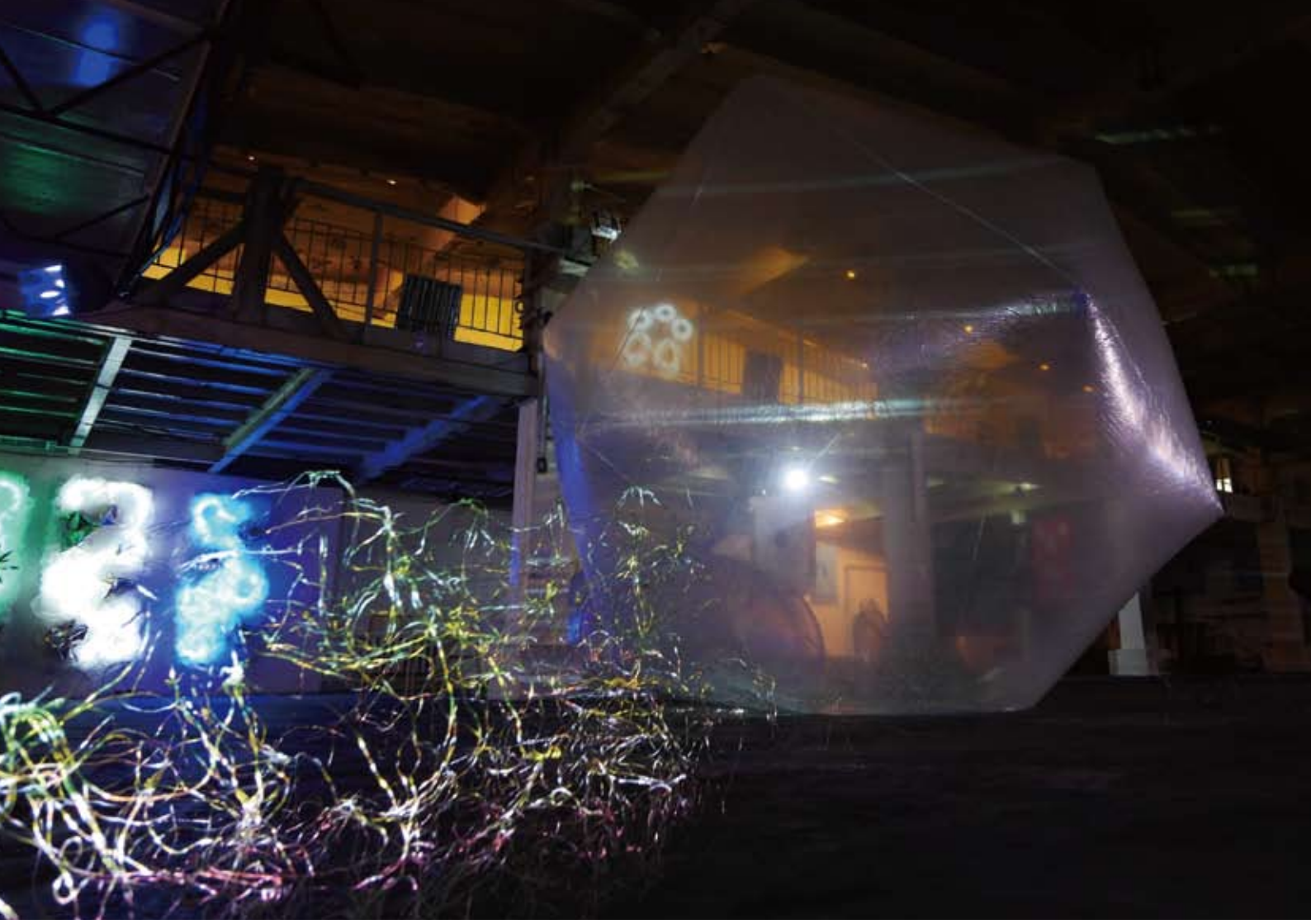
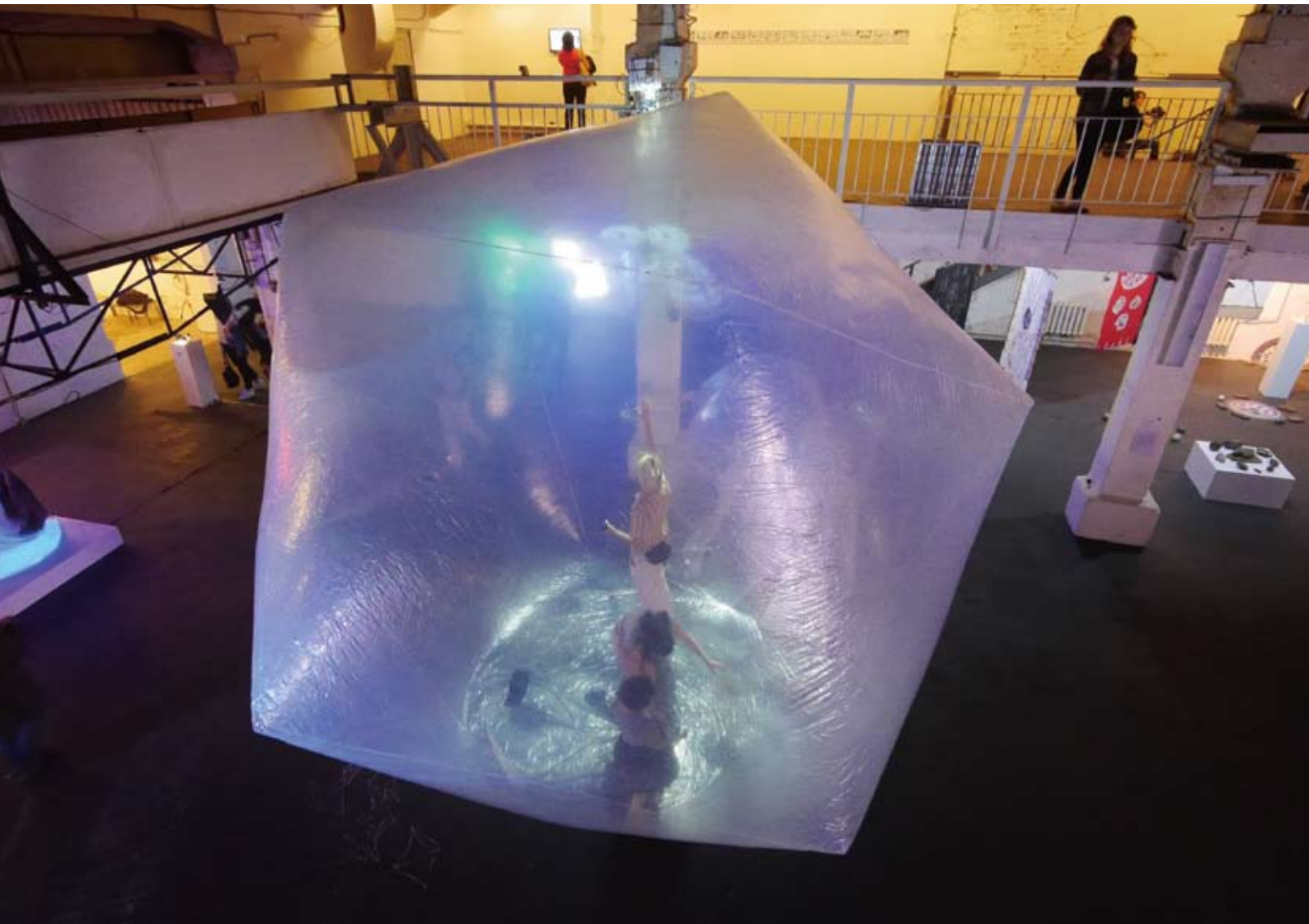
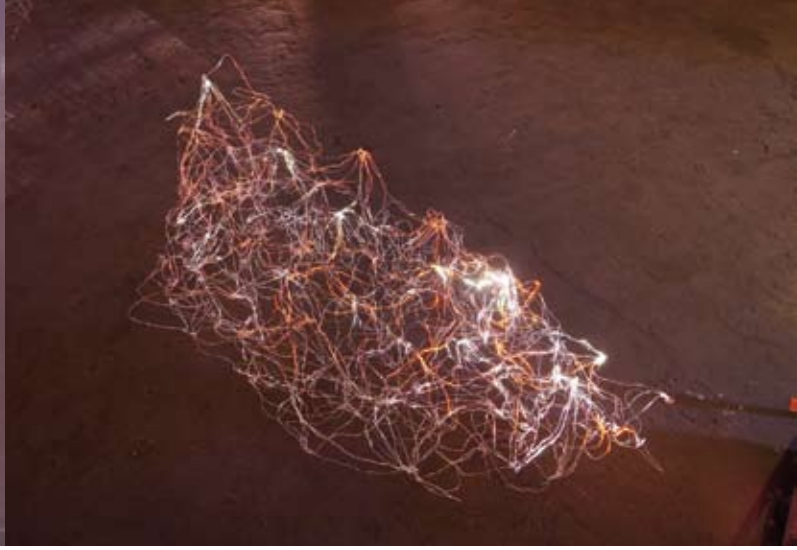
Inter-world-urals (temporariness) / 2015 / 低密度ポリエチレン、扇風機、ステンレス鋼、アルミニウム合金、映像投影 / 550 x 550 x 550 cm / 酒井敏宏氏（映像）との共同作品

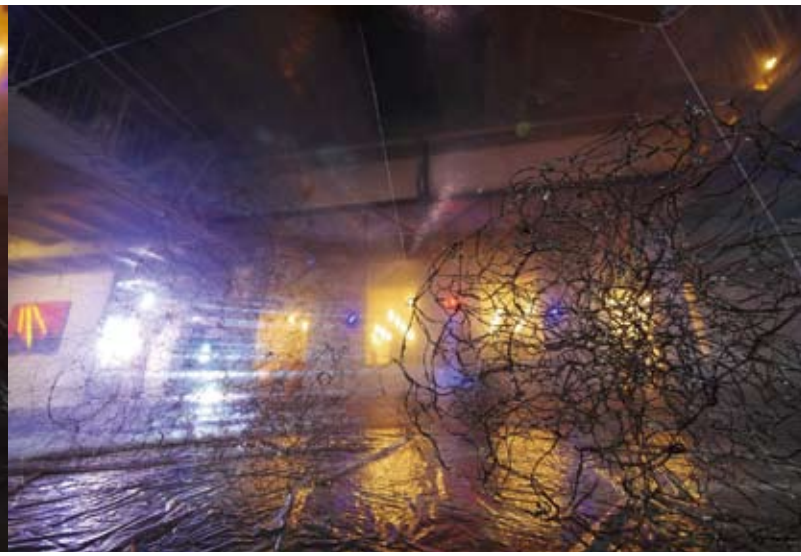


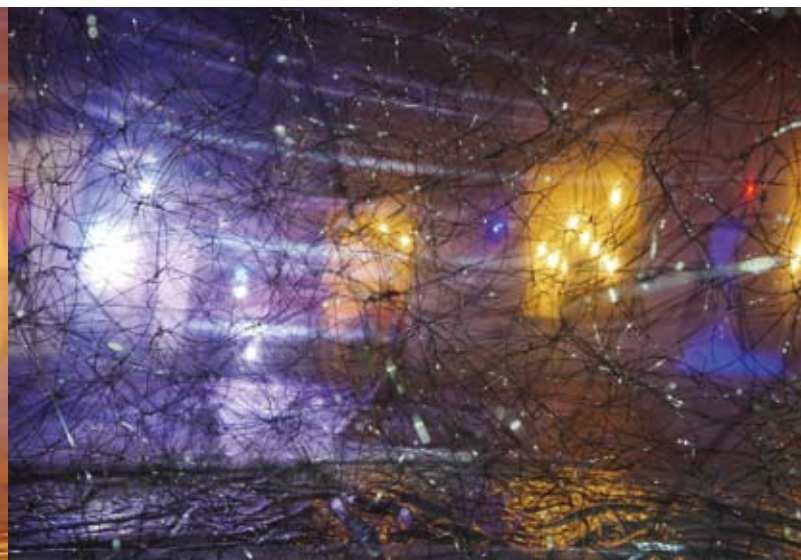












Moscow Biennial 6th, URAL TRANSCENDENTAL

Akihito OKUNAKA / Toshihiro SAKAI

・Concept for my art work

It is essential that everything in the universe is related and influenced each other.

Referring to us: human,
If we can watch your story that how did you come here until this moment from the beginning, it will be shown us a story of your friends, a story of your families and a story of your ancestors...after we can not follow your history, it would go back to a story of the human race, a story of the earth, and finally we will be able to face with the beginning of the universe.

It also says relationships of you and your favorite teacup, and tea. The teacup might be made of porcelain clay mined from a far-off oriental mountain, and the tea might be harvested from a far-off occidental mountain, however those three have come to your side inevitably through various contingencies.

The relationships have no ending, and if everything has already related and influenced each other, it is funny to say “connection” that relationships of others, because we all have already drifted in the world full of the relationships.

For URAL TRANSCENDENTAL
Now then, I am wondering how our culture, civilization, society or the individual would influence on this universe. I am exceedingly interested in the relationships between us and the movement of the stars or planets looked over from Ural mountain range. (For the future or for possibilities of the present)

In this exhibition, I build a huge sphere has semitransparent film. It looks like a celestial body in the heliosphere that comprehend our starlit sky. When observers looks up at it from the inside or the outside, they will watch projected images that the stars and planets go past. They will face to the flow of time through the image, and notice that this is a sensorial experience of time and velocity as the stars.

Inside and out of the huge sphere, several small sphere made by metal wire are lying on the floor.
The small spheres are made in the shape of the universal relationships, and it looks like a vein reaches to the center of the planet. Every observers can touch it freely and play with it enough.
Then they will find their own shadows projected on a film of the sphere, and they will notice they are also a part of the universe through my art work.
Their own motion is conveyed to the air, to a film of the sphere, and finally it warps the sphere as a transfiguration of the work.

Will our relationships reach the stars?
The brilliance of our lives / our sensibilities have related and developed the Occident and the Orient beyond Ural mountain range. They will lead our will to the faraway stars through the relational dynamism won't they?

第六回モスクワビエンナーレ　ウラル・トランセンデンタル

奥中章人／酒井敏宏

・作品コンセプト

この宇宙に存在する全てはすべからく関係し相互に影響し合っている。

我々人間について言えば、あなたがこの時、その場所に至るまでの物語を遡れば、友人との物語になり、家族の物語になり、祖先の物語になり、辿れなくなったところからは人類の物語になり、地球の、そして宇宙の誕生まで遡ることは可能だろう。

あなたとあなたのお気に入りのティーカップとお茶の関係性についてもそうだ。その磁器は遠く東洋の山から採掘された粘土だったかもしれず、そのお茶も遠く西欧で収穫されたものかもしれず、しかしその三者は様々な偶然を経て必然的に貴方の手元に届いているのだ。

しかし面白いのはそれらのこれまでの関係性についても言える。その実、あなたの好む茶葉は大昔に東洋から渡ったものが発祥かもしれず、もしかすると磁器粘土を採掘する山に生えていた茶葉かもしれない。貴方は西欧の生まれで貴方の知るかぎり西欧の家系であるかもしれないが、人類が地球の各地に出現し始めた頃に東洋から西洋に渡った者達が先祖かもしれない。
いいや、それより途方もなく昔、地球がまだガス星雲だった頃、我々に繋がる全ての物質はもっと近しい存在として一緒に浮遊していたかもしれない。

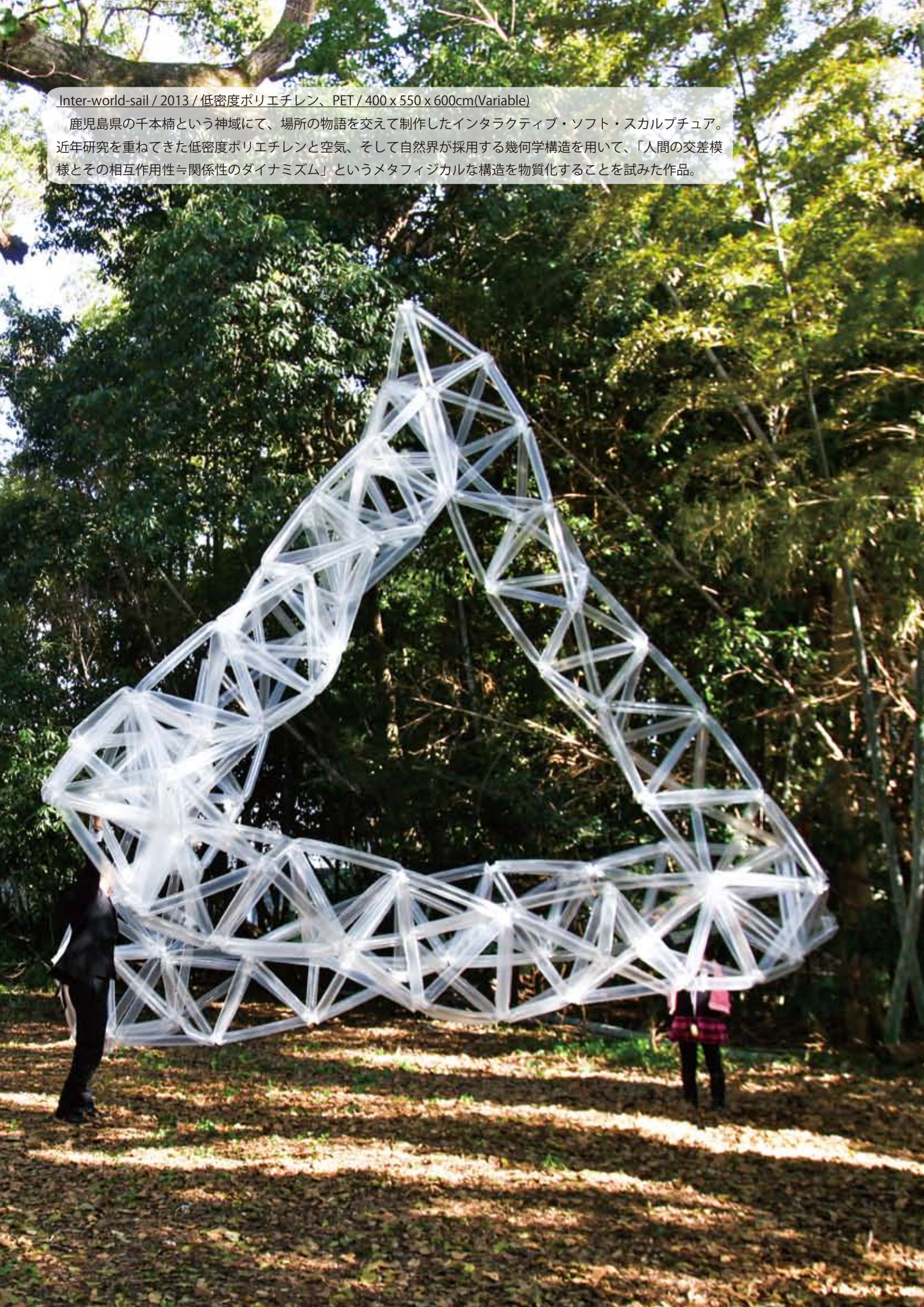
関係性に際限はなく、ありとあらゆるものが既に関わりあって相互に影響しあっているのならば、他者との関係を「繋がり」などと呼ぶのは滑稽であろう。我々は関係性に満たされた世界に漂っているのだから。

「超越ウラル」
さぁ、我々の文化、文明、社会または個人はこれからこの宇宙にどう影響するだろうか。
私はそこでウラル山脈から臨む太陽や惑星など星々の運行と、我々との関係性に強い興味を抱いた。（その未来に、または内在する現在の可能性に）

本展ではウラル山脈から臨む星空を包括するヘリオスフィア（太陽圏）の天球を模造する。
巨大で透明な膜を持つその球体は、観測者が見あげれば、太陽と星が高速で行き過ぎる映像が投影されている。彼らはその外側から、そして内側から時の流れと星々の運行を見つめるだろう。その様子はまるで惑星が知覚している時間とその速度を体感しているかのようだ。

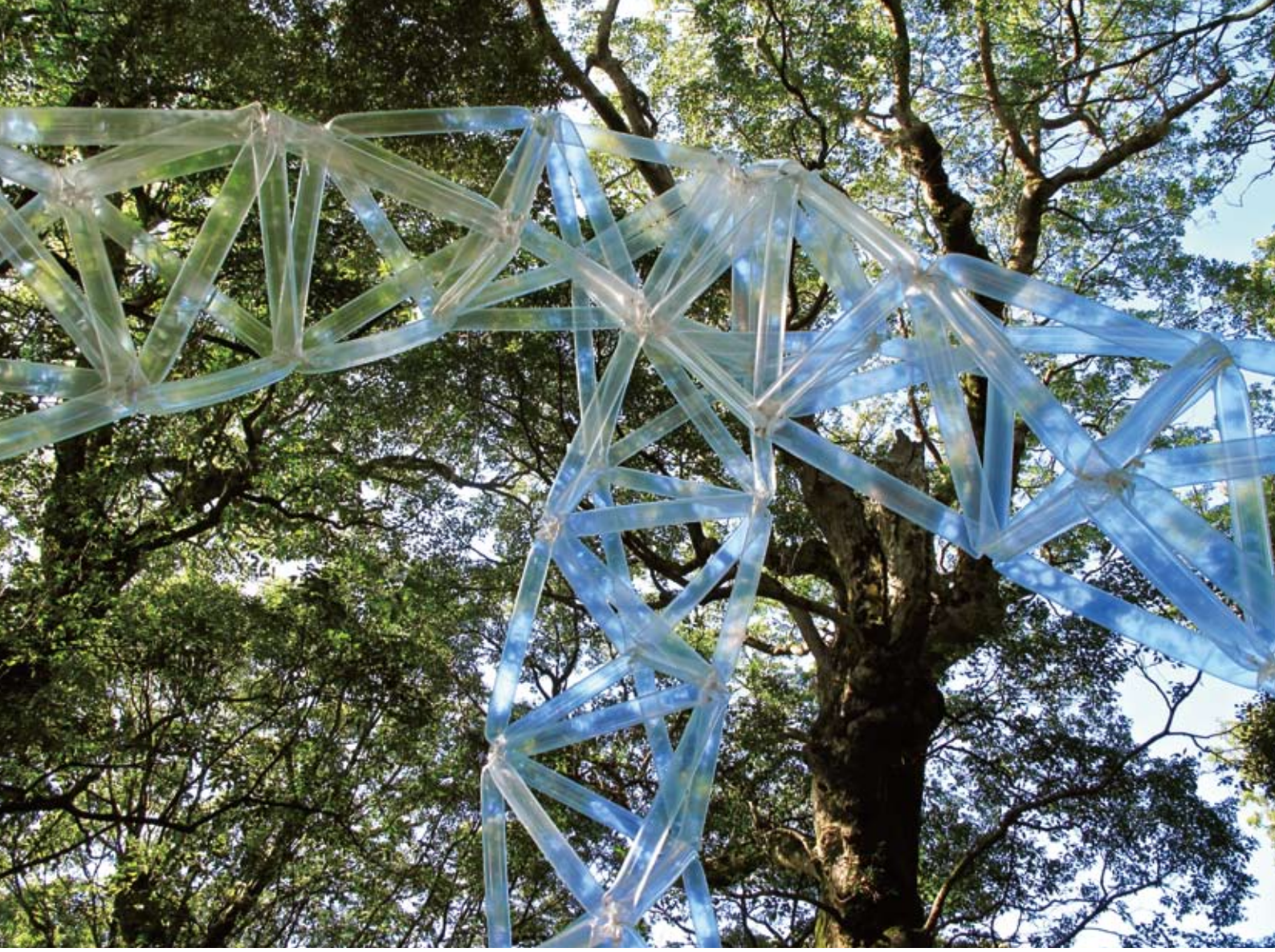
内側には金属線でできた球体のオブジェが転がっている。惑星の中心部へ続く地脈を象ったかようなそれは、普遍的な関係性を縮尺した姿として創出されたものだ。観測者はこれらに自由に触れてることができる。
ふと彼らは気づくだろう、彼ら自身が作品（世界）の一部になっていることに。天球に映る影達が観測者自身であることに。彼ら自身の一挙動が空気に伝わり、膜に伝わり天球を歪ませ、作品を変容させていることに。

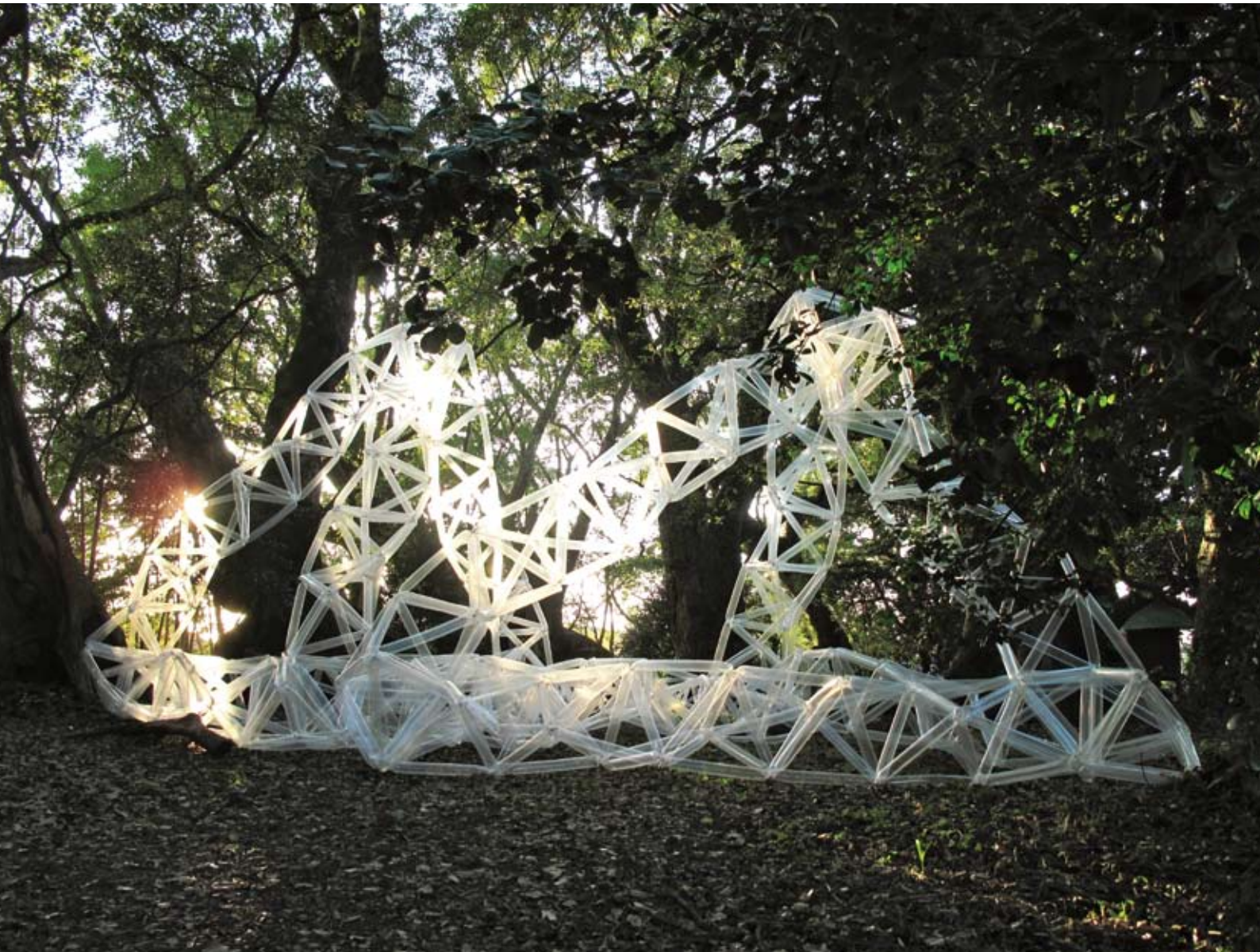
我々の関係性は星々へ続いていくだろうか。
我々の生命の彩り／感性はウラル山脈を越えて西欧と東洋を開拓した。
それは悠か遠くの星々へも我々の意志を関係性のダイナミズムに乗せて導くだろうか。



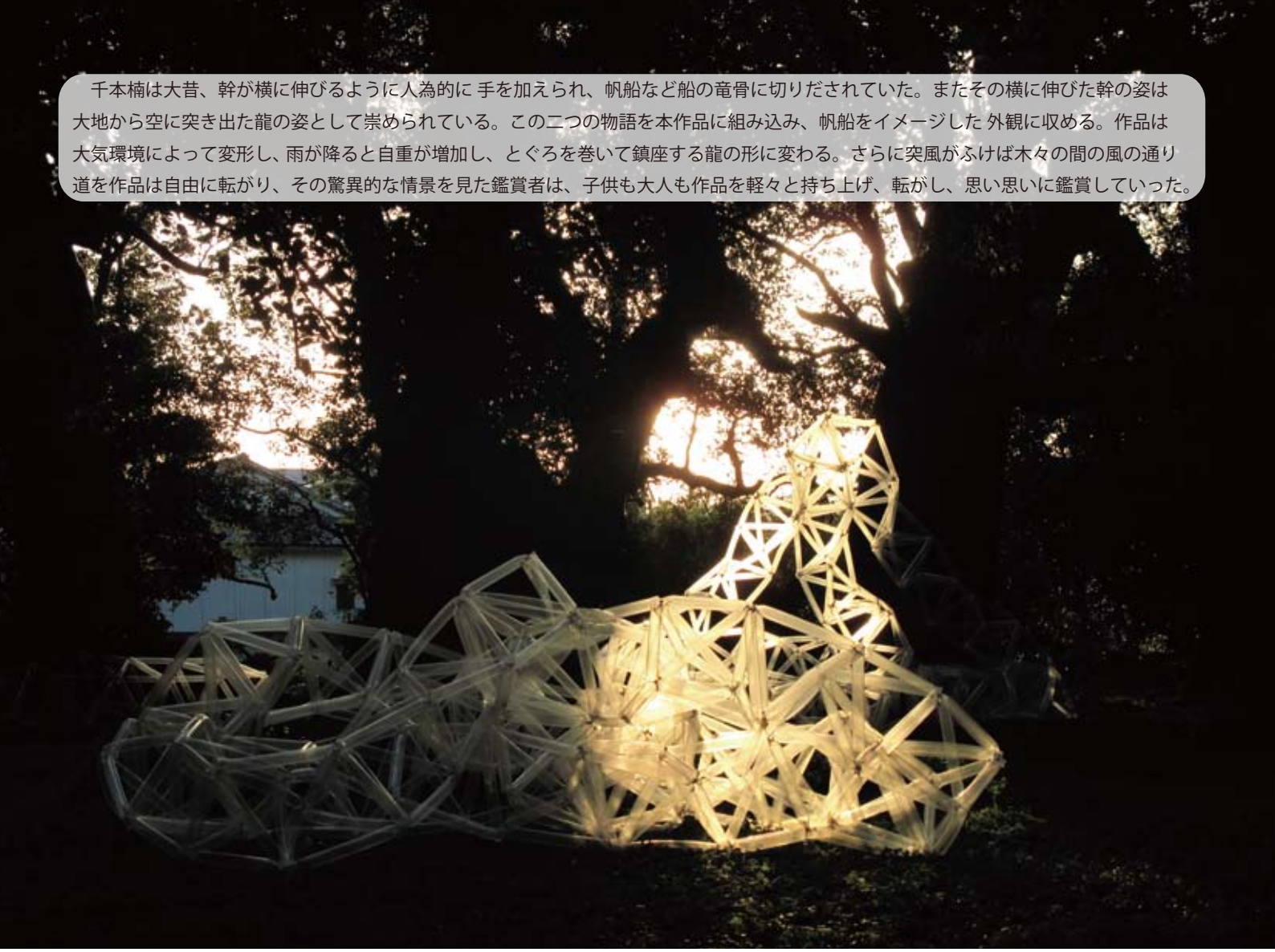
Inter-world-sail / 2013 / 低密度ポリエチレン、PET / 400 x 550 x 600cm(Variable)

鹿児島県の千本楠という神域にて、場所の物語を交えて制作したインタラクティブ・ソフト・スカルプチュア。近年研究を重ねてきた低密度ポリエチレンと空気、そして自然界が採用する幾何学構造を用いて、「人間の交差模様とその相互作用性≒関係性のダイナミズム」というメタフィジカルな構造を物質化することを試みた作品。

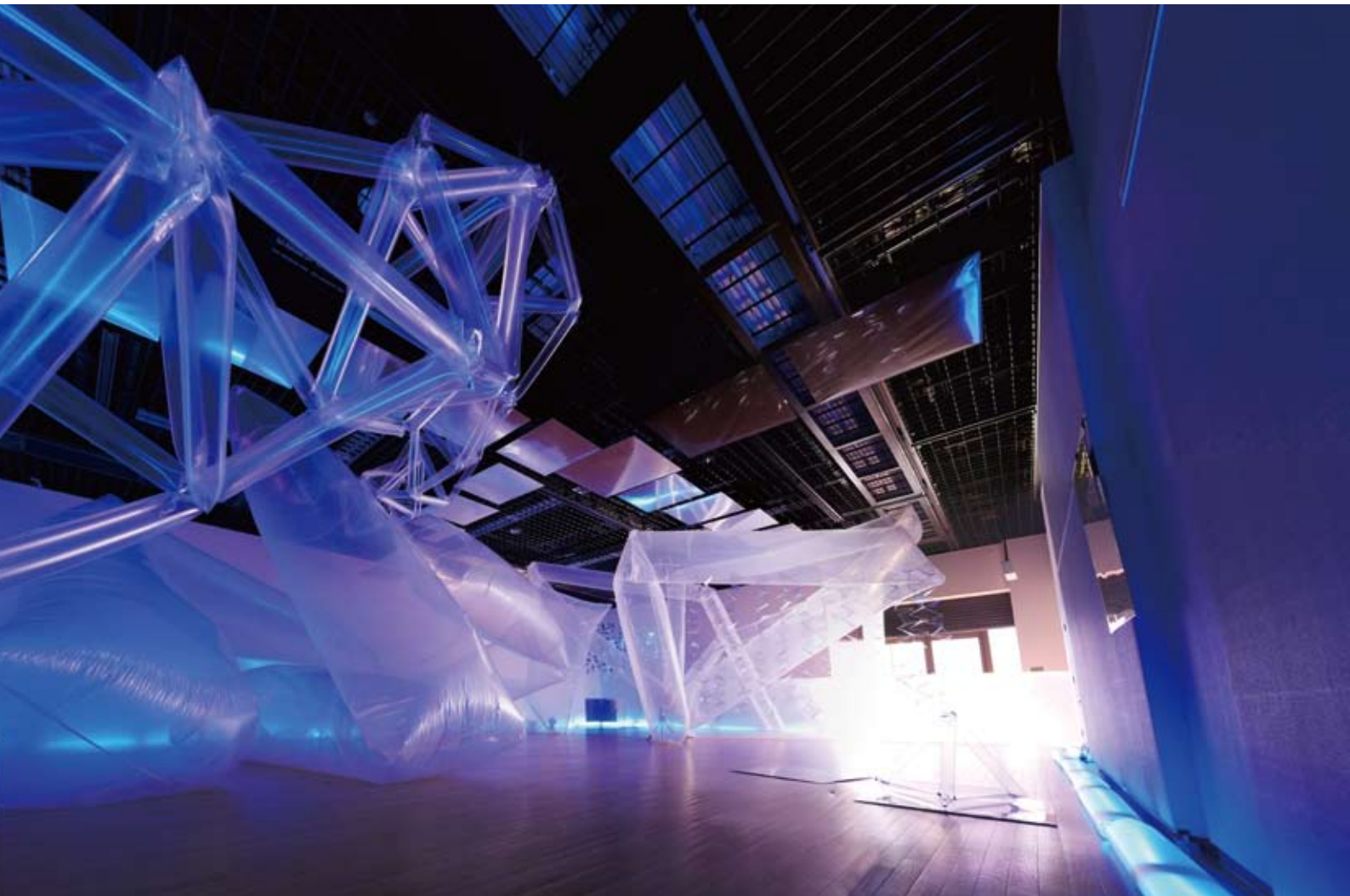




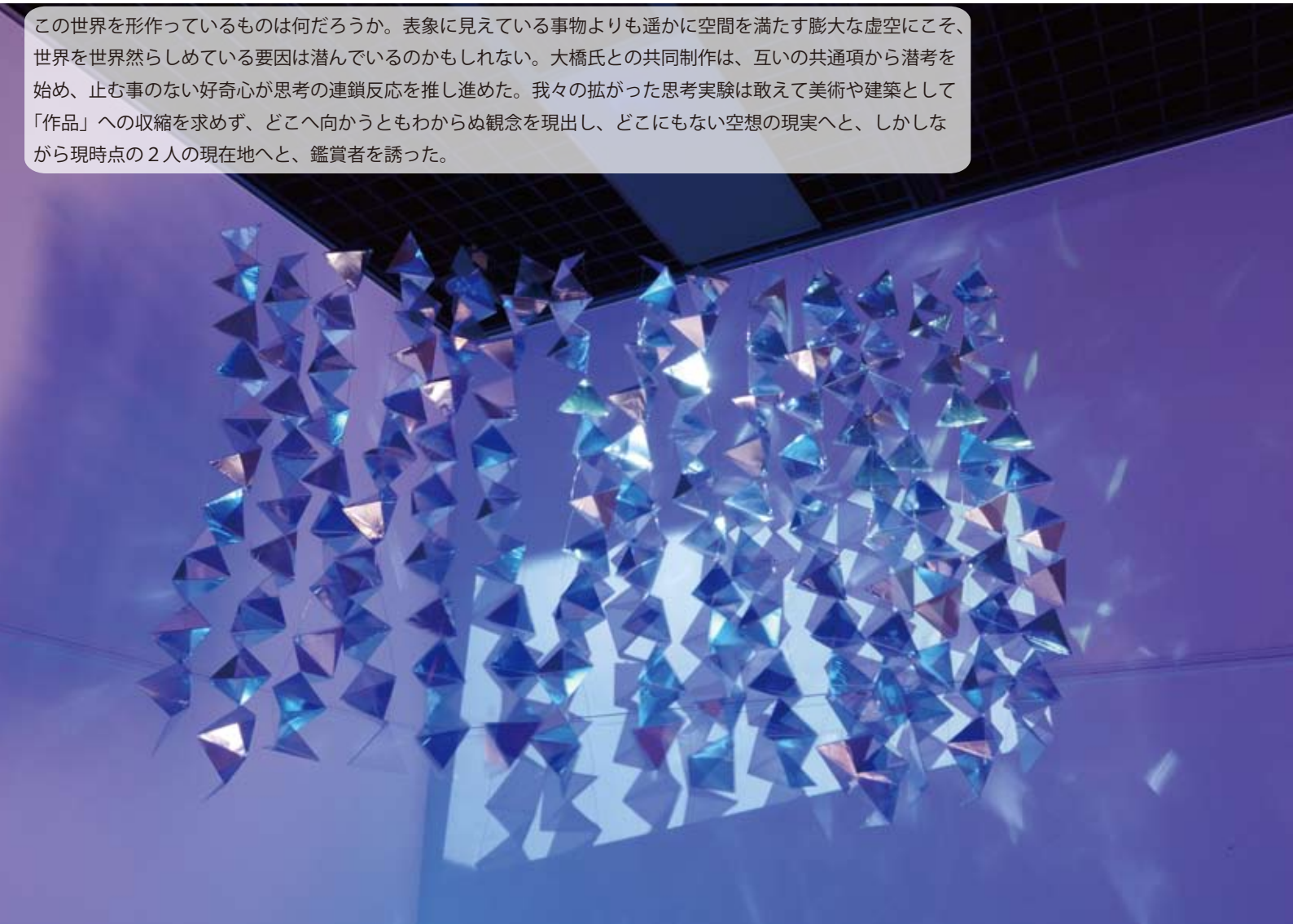
千本楠は大昔、幹が横に伸びるように人為的に 手を加えられ、帆船など船の竜骨に切りだされていた。またその横に伸びた幹の姿は大地から空に突き出た龍の姿として崇められている。この二つの物語を本作品に組み込み、帆船をイメージした 外観に収める。作品は大気環境によって変形し、雨が降ると自重が増加し、とぐろを巻いて鎮座する龍の形に変わる。さらに突風がふけば木々の間の風の通り道を作品は自由に転がり、その驚異的な情景を見た鑑賞者は、子供も大人も作品を軽々と持ち上げ、転がし、思い思いに鑑賞していった。



ＮＯＷＨＥＲＥ / 2014 / 静岡県立美術館 / 低密度ポリエチレン、PET、アルミ複合板ミラーフィルム / サイズ Variable / 建築家：大橋史人との共同制作作品



この世界を形作っているものは何だろうか。表象に見えている事物よりも遥かに空間を満たす膨大な虚空にこそ、世界を世界然らしめている要因は潜んでいるのかもしれない。大橋氏との共同制作は、互いの共通項から潜考を始め、止む事のない好奇心が思考の連鎖反応を推し進めた。我々の拡がった思考実験は敢えて美術や建築として「作品」への収縮を求めず、どこへ向かうともわからぬ観念を現出し、どこにもない空想の現実へと、しかしながら現時点の２人の現在地へと、鑑賞者を誘った。



考えることと建築は似ている。想像することと雲は似ている。
星々と素粒子の性格はどこか似ている。浮くことと沈むことに大した差はない。
地球を巡る大気の流れと社会を巡る我々の関係性はきっと近しい。（作品解説より）

Inter-world-ShizuCan / 2014 / 低密度ポリエチレン、ファスナー、扇風機 / 2500 x 2700 x 40000 (variable)

Inter-world-Michishio / 2014 / 低密度ポリエチレン、
ファスナー , 扇風機 / 2500 x 2700 x 40000 (variable)

【スタジオツアー】CAMAC アートセンター / 2015 /
助成：朝日新聞文化財団、Ténot 財団

Inter-world-fukiage / 2012 / 低密度ポリエチレン、PET / 300 x 700 x 1000cm(Variable)

「吹上」という名前の過疎化した町で行ったプロジェクト作品。町の名の通り、「吹き上がる」作品を制作。

この構造体は、世界に潜む構造の力 (例えば大気や 風の力) にうねり、揺れる。鑑賞者はこの空間的立体作品に入る時、作品の内側から周囲の景観と構造体のうねりとを同時に観る。この展望の中にダイナミズムの関係構造を描く。本作は鑑賞者と場所とに相互作用性をもたらし、触れて楽しむ遊び場となった。

地域住民と〝吹き上がる情熱〟的な思いを込めて絵やメッセージを描き込み、さらに風船状の部品に息を吹き込んで膨らまし連結していく。増殖して大きくなった作品は時折、風に煽られて立ち上がり、まさに「吹上」を現す。

ダイナミズムという見えない観念を、空間充填立体化することで現実化し、体感鑑賞を目論んだ意欲作。